

第53回日本核医学会学術総会 印象記

田口 英俊

Taguchi Hidetoshi

第53回日本核医学会学術総会が、2013年11月8日(金)～10日(日)にかけて桑原康雄会長(福岡大学病院放射線部教授)の下、福岡市福岡国際会議場において「核医学の閃き—原点と未来への創造—」をテーマに、日本核医学技術学会と合同で開催された。

福岡市の街は、福岡空港からJR博多駅へ地下鉄で約5分、JR博多駅から繁華街の天神まで地下鉄で約5分、JR博多駅から学会会場までバスで約10分、駅周辺には宿泊施設もたくさんあるため、利便性がとても良かった。会場は2003年に完成した比較的新しい施設で、建物は2つに分かれているものの渡り廊下でつながっていたためほぼ1か所に集約されており、移動の煩雑さを感じることなく学会に集中することができた(写真1)。

11月の福岡市は暖かく、コートを着ていな



写真1 福岡国際会議場

くても昼夜外出できるような気候で、開催期間中は好天にも恵まれ過ごしやすかった。さらに、博多のきれいな街並みとふぐや明太子などの名物料理も堪能し、充実した滞在ができた。

開会講演、招待講演

第1日目の早い時間に筆者の演題発表があったため、開会式とそれに続く大会長講演・合同講演を聴講できなかったことは、残念であった。招待講演は5題(全て海外の演者によるもの)あり、テーマは昨年続き分子イメージングに関するものが多かった。Heiko Schöder氏の講演(招待講演2)では、新しい様々なトレーサーについての話があり、興味深い内容であったと同時に、個人的には生化学の復習という意味でも非常に勉強になった。

シンポジウム

会期を通して6つのシンポジウムがあり、テーマはFDG-PETなど診断の話からRI内用療法の話まで幅広く用意されていた。「FDGによる治療効果判定と予後予測」では、FDGを用いた診断の進歩とこれから期待される役割について、各がん(乳癌、悪性リンパ腫、消化器癌、肺癌)ごとに、専門の医師の視点から様々な意見を聴くことができた。FDG-PETは、現在、肺癌においては病期診断目的かあるいは再発診断目的に使われているが、今後は治療効果判定や予後予測に使われるようになるのではないかという話があった。現時点で悪性リンパ

腫のみが保険適応になっている FDG-PET を用いた治療後効果判定に関しても、今後の検討が進めばほかのがんに適応が広がっていくかもしれない。

教育講演

教育講演は、核医学に関するものが 14 講演と、一般画像診断に関するものが 5 講演行われた。核医学教育講演では、ソマトスタチン受容体シンチグラフィ（SRS, オクトレオスキャン®）などの詳細な画像の説明を聴くことができた。しかし SRS や PRRT（放射性核種標識ペプチド治療）などの薬剤が、世界的には標準とされていながら日本では保険承認されていないため、「日本は今ガラパゴス状態です」という演者のメッセージがとても印象に残った。今回の学会中だけでも何度も、海外と国内の核医学を取り巻く環境の違いに関する話を耳にすることがあり、海外で使える薬が日本では使えないという現状にもどかしさを覚えている医師が多いことが伝わってきた。

脳 FDG 画像の読み方では、通常行っている視覚読影だけでなく SPM や 3D-SSP といった画像統計解析によって得られる情報も使い、総合的に診断することが重要であるという講演であった。筆者は、日常業務で認知症診断目的の FDG-PET 画像の読影を行うことはないが、このような知識に接することができるのも大きな学会に参加する醍醐味だと思う。

近年恒例になったという一般画像診断の教育講演の会場内には、若手医師からベテラン医師まで多数参加しており、熱気が溢れていた。内容は基礎的なものを中心に組み立てられていたが、頭頸部・胸部・腹部骨盤・肺結節・肝胆臓に婦人科 MRI と、幅広い分野の講演を聴くことができた。筆者のような解剖学書を片手に普段の PET 読影を行っている若手にとっては、明日からすぐにも役立てられそうな内容が多く、うれしかった。

一般演題

例年同様、今学会でも多数の演題が発表され

た。内容としては、骨シンチの定量化のためのソフトウェア（BONENAVI）や骨シンチ画像経過観察 Viewer ソフト（VSBONE）などの新しいソフトウェアに関する発表が多く、その関心の高さが窺われた。

腫瘍・PET・生理的集積の講演では、“小円筋”が話題になっていた。薬剤静注時の手技により集積の強弱が変わるというもので、会場内で熱い議論が交わされていた。

筆者自身は今回、日本核医学会総会で初めての演題発表を行ったが、事前には全く想定していなかった質問を受け、回答できずに悔しい思いもしたが、非常に良い経験を積ませていただいた。

まとめ

3 日間の日程は盛況のうちに終了し、たくさんの知識を共有し、日進月歩の医学を肌で感じられる大変有意義な学術大会となった。今回の学会を通して感じたことは、PET-CT の普及や SPECT-CT といったハード面での進歩だけでなく、最近では BONENAVI や SPM や 3D-SSP といった画像統計解析などのソフトウェアの進歩も目覚ましくなっていて、診断に今まで以上の客観性や均一性が出てくると期待される。

学会最終日には、大相撲九州場所（11 月場所）が学会会場の隣の福岡国際センターで開催され、たくさんの相撲ファンを見掛けた。今回（平成 25 年）の九州場所は、元ビートルズのポール・マッカートニー氏が観戦し話題になるなど、例年以上の盛り上がりだったのではないだろうか。

次回は大阪で

次回 2014 年の学術総会は、大阪大学の畑澤順先生を会長に、大阪市・大阪国際会議場で開催される予定である。毎年少しずつ HOT な話題は変わっていくだろうから、来年はどんなテーマの講演が多いのか今から楽しみである。また、大阪市は名物料理が多く、観光名所もたくさんある街なので、公私ともに充実した時間を過ごせそうである。

（千葉県がんセンター 画像診断部）